

会員の広場



『言志四録』を詠む

廣田 秀雄（東京）

現役の頃、当時の上司に「君は『言志四録』という書物を知っているか」と聞かれたことがあります。それ以来、この本のが気になるっていて、図書館に行き調べたところ、『言志四録』とは江戸後期に佐藤一斎という学者が、40年をかけて記した漢文体の語録で

あること、1133条からなる大冊で、特に修養の糧、処世や教育の心得として『菜根譚』と比肩すべき書物であることを知りました。

両書ともに漢文調で、音読するとより心に響き、理解が深まるように思います。加えて、声に出して詠むことでオーラルフレイルを予防する効果もありそうです。

四録ということからも分かるように、『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志耄録』という4部作で構成されています。

「言志」という言葉については、中国の古典『書経』や『論語』が出典になっているようです。幕末の英傑、西郷隆盛も島流しにあった時に、読書と思索の日々の中で、座右の書として『言志四録』を愛読していたそうです

す。特に共感していた101条の語録を書き出したものが、西郷の死後、明治21年に出版された『西郷南洲手抄言志録』として残されています。そのことから、西郷隆盛の人格形成に「言志四録」が大きな影響を及ぼしたことがうかがわれます。

ここで『言志晩録』から名言を一つ。

「少にして学べば、則ち壮にしてなすことあり

壮にして学べば、則ち老いて衰えず

老いて学べば、則ち死して朽ちず」

（第六十条「学問の必要と効果」より）

小泉元首相も国会答弁で引用していました。佐藤一斎は、この言葉のとおり、88歳で亡くなるまで現役の学者として活躍し、最後の『言志耄録』を出版したのは83歳のときでした。江戸時代としては大変な長寿で、その秘訣は「学び続けることにある」といい、自らが体現しています。

人生100年時代、これからも経済倶楽部の講演会に参加して友人（会員）との交流を通じて、学び続ける姿勢を持ち続けたいものです。

